

バーンウェルト

DIE Bahnwejt

オープニング ストーリー

平沢 健一 桑田 浩之

平成4年 10月 20日

原作・平沢 '91 8/20

編集・桑田 '92 10/20

目次

プロローグ	2
出現	2
都市	3
ゲーリー教授	4
Lar Keior	5
略奪	6
転移	7
Verle a Zohll	9

プロローグ

遥かな一万年の太古の世界に栄えた超古代文明。超科学と神秘の魔力によって支えられたその力は大地の形を変え、大海の流れさえも自在に操ったという。

人々はその偉大なる力を以て、新たな大地を創造した。我々の住む世界の近くにありながら、大きな壁によって隔てられた世界。時空間の狭間に創造されたその世界の名は「Verle a Zohll(ヴェレアトール)」。

その世界は住むべき主達はその力を制御するすべを失い、滅亡していった後も時空間を漂い続けている。

出現

巨大な航宙船だった。全長は4km。かつてはカーマインレッドの光沢を放っていたと思われる船体は、長い年月を経る内に煤け老朽化していた。わずかに漏れる船内照明と、静かに、しかし強力な青白色光を放つ動力モーターの輝きからそれがまだ廃船と化してはいないことだけは確かである。そしてその船首はまっすぐに前方の惑星を目指し、前進していた。

その船は外宇宙から来たものではなかった。もし主星圏外から飛来したものであれば、その惑星の住民はとうにその近づいて来る光を探知し、迎え入れるかあるいは退去させるかなどのなんらかの行動を起こしていただろう。しかし、それは主星からだいぶ離れてはいたものの、間違いなくその惑星圏内に忽然と出現したのであった。明らかに転移航法能力を持つ船であることは容易に想像できる。だが、その船がどこからやって来たものなのか、あるいは単に空間を超えて来ただけのものなのかは、外見からは推し測りようがない。

船内には黙々と計算と制御を続ける自動機械以外の生命はなかった。記憶容量や処理能力においてはるかに人間を優るそれを生命と呼べるかどうかは意見の別れるところだが、少なくともその機械には人間の知性に相当する機能は組み込まれていなかった。やがて惑星の大気圏が近づいて来たことを認識した機械は、減速と惑星軌道の同調化、そして大気圏突入のための防護措置を施し始めた。

都市

ニュースフォームはどれも内容は同じだ。カノールはコーヒーをすすりながらすでに読み飽きた記事を再び読み返していた。彼の名はカノール・マクガイア。宝探しと命がけの冒険に燃えるトレジャーハンターである。太古に栄えた文明の遺産。その中には価値のあるもの、夢のあるもの、少なくとも人を惹きつけずにはおかない何かがある。カノールもその何かに魅入られた人間の一人だった。

その時ドアがあいて一人の少女が入って来た。彼女の名はラーニア・ハリモンド。カノールの助手を務めている。今では伝説とも化した大考古学者、ライエル・ハリモンド教授の孫娘である。「ねえ、スクリーンでニュースをやってるわよ」「ああ、見に行こう」

スクリーンには異様な形態をしてはいるが、決して理解を超えるものではない人工の構築物と思われる物体が表示されていた。しかし大空をバックに映し出されているその姿からは、全長 $4km$ というその大きさを推量することは困難だ。

「飛来した巨大飛行物体は依然として沈黙を続けており、議会では攻撃的意図を持って飛来したのではないとしながらも、軍部による監視を今後とも継続し、応答のない場合は調査隊を派遣する方向で検討を進めております。また、有識者の中にはこれを古代大戦期文明の遺跡であるという見方をする者もあり、貴重な遺跡であると同時に未知数の攻撃能力の危険を指摘する声も出始めております。

繰り返します。巨大飛行物体の全長は $4km$ 。アルガスラル海上空 $38000m$ を非常にゆっくりとした速度で極点方向に向けて航行を…」

ラーニアは言った。

「なにか面白いものが見つかりそうね」

「そうだな。議会の調査隊が派遣される前に行動しなきゃ。今夜中にやつに乗り込むことにしよう」

「きゃっ♡ 財宝とか宝石とか積んでいないかしら」

しばしの沈黙の後、カノールは小さく答えた。

「… たぶんないと思うけど…」

ゲーリー教授

同じようにスクリーンを見つめる一人の老人の姿があった。彼はゲーリー・マクマホイ教授。かつて天才科学者と呼ばれた彼に何が起こったのかを知る者はない。少なくとも今ここにいる男は世界に対する憎しみと復讐を誓い、古代文明の力を利用して世界征服を企てるマッドサイエンティストである。

ここはゲーリー教授の隠された秘密研究所のひとつである。彼は世界中に自分の秘密研究所を持ち、そしてその全てが彼自身とそのロボットの手によって作られたものなのである。彼には少なくとも部下と呼べる人間はいなかった。人間を憎み、蔑んでいる彼にとっては、自らが設計したロボットこそ忠実な下僕であり、彼の存在の基盤であった。彼がまだ人類に貢献していた頃、彼の発明したアーキテクチャは人類の量子制御技術に革命をもたらすこととなったが、それも過去の話である。

そして彼はいま、分析を終えた主コンピュータと自身の推論を比較し終わるところであった。

「すなわち、古代大戦期文明によって創造された時空都市、“Verle a Zohl” より飛来しせし船。確率 76%」

「時空転移を実現する搬送波はいかなるエネルギー形態を有するか」

「不明」

「当該船の駆動機関は“Verle a Zohl” との物理的相互作用を必要とするか」

「肯定的」

「… バルキーニュ！」

バルキーニュと呼ばれ現われたものは、人間の子供ほどの大きさを持つロボットであった。外見からは想像もできないことだが、そこに内蔵された結晶構造物質には人間の数倍の記憶と処理の能力を持ち、事実バルキーニュは人間の大学教授よりも知能は

高いのである。

「ここに。Professor」

「あの古代船を捕獲、調査する。支度をせよ」

「了解致しました。Professor」

Lar Keior

闇の中、前方に巨大な“Lar Keior”が浮かんでいる。カノール達の乗る飛行メカは強力なクローキング・デバイス(遮蔽装置)を搭載しており、“Lar Keior”や軍のレーダーに探知されることはない。そうはいっても熱放射やプラズマ痕跡を完全に消し去れるわけではない。“Lar Keior”に潜入するためにはひとえにタイミングと迅速な操作が必要だった。

「クローキング・デバイス作動よし」

「ねえ、どっから中に入るつもり?」

「軍部の監視に見つからないようにしなけりゃ。艦底の排気ダクトからでも潜り込むか」

レーダー・チャートによる分析を終えたカノールが言った。

「よし! GO!」

ゆっくりと明滅する動力炉。動力ホールの周囲は暗く、かなり荒れ果てていた。破壊された機器はないが、汚れ散らかっている。そこには奇妙なアンバランスがあったが、そこに生命が訪れなくなって久しいことを考えると、恐らく片付けるものがそこにはいなくても、修理や整備は定期的に行なわれていることを示している。

そのなかで漆黒の金属版が動力炉の明滅と共鳴している。人気がない動力炉に突然ドアが開き、カノール達が入って来た。

一瞬金属版がきらめき、年老いた声がどこからともなくカノール達に語りかけて来た。

「“Lar Keior”へ来たりし者は久しい」

「誰だ。どこにいる？」

カノールは驚いて大声を上げた。

「あの金属版よ」

その方向から声が聞こえて来たわけではない。しかしラーニアは本能的にそうだと悟った。

「“Lar Keior”？ この船のことか？」

「“Lar Keior” は “Verle a Zohll” よりい出て、“Verle a Zohll” に帰る」

「“Verle a Zohll” ですって？ それって伝説の都市のことじゃない？ やっぱりこれは古代文明の遺跡なのね」

「“Verle a Zohll” … 伝説の時空都市か… この船は時空を越えることができるのか」

「“Verl Bious” の力」

「“Verl Bious” とは？ この船の動力源なのか」

「“Verle a Zohll” を支える “Verl Bious” の力」

金属版はただそれを繰り返した。その時、遠方で爆発音がし、“Lar Keior” がわずかに振動した。

略奪

“Lar Keior” の外ではロボット艦隊を率いたゲーリー教授が軍の戦闘艦を攻撃、破壊していた。

「軍の全艦艇につぐ。我が進路を妨害するものはすべて破壊する」

「妨害していなくても破壊しています。 Professor」

ゲーリー教授はじろりとバルキーニューを見たが、何も言わなかった。その時スクリーンがともし、端正ではあるが冷徹な表情の男が現われた。顔の半面がメカに覆われ、その瞳にはすでに人間の持つはずのあたたかい光はない。

「Professor。 軍の艦艇の掃射、全て完了致しました」

「よくやった、デスハーン。我が艦を古代船に接舷せよ。わしはこれより古代船に乗り込み、調査を開始する。おまえは艦橋で待機するのだ」

デスハーンと呼ばれたサイボーグはやはり表情を変えることなくうなずいた。

「ご命令に従います。Professor」

ゲーリー教授のメカは“Lar Keior”に強引に接触した。

船内ではカノール達が自分たちのメカに向けて脱出を開始した。だが、そこへ正面からゲーリー教授がロボットを引き連れて通路を歩いて来た。

「ゲーリー教授!!」

そう。カノールは以前にもゲーリー教授に仕事を邪魔されたことがよくあった。彼がもう少しで宝を手に入れられそうになる時に、ゲーリー教授の強引な略奪によってめちゃくちゃに荒らされてしまうのだった。

「ふん、ねずみどもか…む…その手に持っているものは何だ?」

「…」

「おとなしくそれを渡せ! この船はすでに私のものだ」

ロボットたちの銃口が威嚇するように持ち上がり、カノール達に狙いをつけた。

転移

“Lar Keior”の制御ルームでは、自動装置がはるかな昔にプログラミングされたシーケンスを黙々と実行していた。というより、現在その装置はひとつおりの制御を完了し、ただひたすら各装置のアクノリッジを待ち続けていた。

やがて一つの装置が出力を表示した。

測定誤差 ±0.000 方程式算出完了

その表示を読む者はすでに誰もいなかったが、出力表示と同時に一つのパルスが自動装置に伝達されていった。突如として制御装置は眠りから覚めたように次々と活性化を始めた。動力炉も明滅をやめ、白く輝きはじめる。コンソールにはめまぐるしく情

報があふれ、航法コンピュータらしきものが航路のプロットを始めている。

そしてカウントダウンが始まった。

動力音が高まり、急に暗さを増した通路では、ゲーリー教授が不安げに周りを見回した。

「…何事だ?」

「いまだ!」

その一瞬の隙を付いてカノール達は横の通路に飛び込んだ。再び走りだすカノール達。ようやく自分たちのメカにたどりつき、発進準備も整わぬまま“Lar Keior”から離れる。しかし、同時に“Lar Keior”のカウントダウンも終了した。

一瞬にして“Lar Keior”船内の全てが凍り付いたように動きを停止する。

“Lar Keior”の周囲がゆがみ、黒い球体で包まれ消えていく。

“Lar Keior”はやはり単に空間だけを転移する宇宙船などではなかった。それは時間と空間そしてもう一つの時空間軸を含めた5次元の時空間を移動していた。

一瞬の暗黒と静寂。相対的に異なる時空への転移は、少なくともカノール達の固有時間にとっては極めてわずかな間に行なわれた。そして次の瞬間、彼等は時空都市“Verle a Zohll”にいた。

時間の呪縛から解き放たれたカノール達のメカは、しかし転移時の空間のゆがみによって変調をきたし、エンジンが暴走、爆発してしまった。だがこれはある意味では幸運な出来事だったのかもしれない。“Lar Keior”の転移時にもカノール達のメカがもう少し離れていたら、彼等はメカごと原子の塵と化していたからだ。

“Verle a Zohll”に転移した“Lar Keior”はいずこへともなく飛び去っていった。

Verle a Zohll

やがて墜落したメカの中でカノールとラーニアは気がついた。

「ここは…どこなの!？」

ラーニアが呻いた。

「“Verle a Zohll” なのか!？ おい! 答えろ!!」

漆黒の金属版はただ光り輝くばかりである。

DIE Bahnwejt